

海外シリーズ⑨

マンハッタンにて

岡部伸子

コロンビア大学のキャンパスを東側にぬけて1ブロック歩くと、かろうじてコロンビア大学の土地とブラックハーレムの境を作っているモーニングサイドパークがある。そのモーニングサイドパークに向かう1ブロックのちょうど真中辺りの地下に、コロンビアの学生がたむろする安バーCDRがある。薄暗くて狭い店内にはビリヤードの台が1つと隅の方にダーツの場所があり、傾いたテーブルと破れたイスが幾つか。イスが足りない時には店の奥の方に積み上げられた中からこわれていないのを自分で探して持ってくる。入口近くの短いカウンターでビールの大きなピッチャーを買い、人数分のコップを取ってくるとその夜の宴会が始まる。かつてはそのカウンターの奥の床にいつも同じ浮浪者が1人ころがって寝ていたが、最近では追い出されたのか、他にもっといい棲家を見つけたのか、いなくなってしまった。化学科の合同ゼミで研究室の誰かが講演した後や、何かイベントの後の打ち上げ、夕食後ちょっと飲みたい時など、ときには教授も一緒に皆でやってきては、ビールを飲みながら何時間でもしゃべり、騒ぎ続ける。皆いつも誰かに話したいことで溢れているようで、本当によくしゃべり、人の話に意見を述べ、よく笑う。ゼミの終わるのは夜10時だし、そうでなくても飲み始めるのはたいてい9時か10時。最も盛り上がるのは12時頃、そして2時、3時になると皆適当に引き上げて行く。コロンビア大学は、マ

ンハッタンの中に、キャンパスの外にもかなりの土地を持っており、多くの学生や研究員は、キャンパスに近い、そうしたコロンビアのアパートに住んでいるので、夜中過ぎ、明方になっても5分か10分歩けば家に帰れるのがいい所である。普通のアメリカの感覚では、パーティーの後でも何マイルかの道を自分で運転して帰らなくてはならない。

コロンビアの土地といえば、マンハッタンのほぼ中央にあっていつも観光客で賑わうロックフェラーセンターは、かつてコロンビアの農場で、その後もロックフェラーの税金対策もあってずっとロックフェラーに賃貸していたが、一昨年ついに4億ドルの現金で、ロックフェラーに売り渡したようである。

話は戻って、なぜこの汚い安酒場CDRがそんなに印象的で、また、我々がここにばかり出入りしているか考えてみると、コロンビア大学のまわりでここが、学生とか我々のようなお金のない連中が安心して何時間でも居座れるほとんど唯一の場所だからである。

コロンビア大学は創立1754年、歴史ある東部の名門私立大学の1つで、大都会の中の大学という点でも早稲田と似通った所もあるような気がするが、キャンパスのまわりは、はるかに地味で、早稲田本部のまわりや高田馬場周辺のような賑かさはほとんどない。

このためか、学生が自分のアパートで同じようなドリンクパーティーを開くことも多い。ホストの学生は飲物と簡単なつまみを用意し、化学科中に張り紙をして知らせる。やはり10時頃から知った顔知らない顔が次々と現れ、アパートは人だらけ、皆てんでに飲み、しゃべり、踊り、各々

旧姓：清水

コロンビア大学 化学科 技官

(昭和55年応用化学科卒・新制30回

同 57年大学院博士前期課程修了)

好きな事をして自分のエネルギーを発散させる。真夜中近く宴たけなわの頃、高級ワインをぶら下げた教授がふらりと現れて仲間に加わることもある。

コロンビアの化学科教授陣は、30歳前後の若い助教授まで含めても16人、と比較的小世帯だが、そのほとんどが世界的に有名な化学者で、常に活発な研究を続けている。全体がいつも活気に溢れ、しかも和気あいあいとしていて、週1度の合同ゼミには、ノーベル賞受賞者から新進の若い研究者までいろいろな招待講演、続いて学内のポストドク、学生の講演等が行われ、鋭く活発な討論が続けられる。こちらの学生は素直で物怖じしないから、相手がどんな大学者でも疑問点はすぐ質問し、相手の仕事に意見を述べたり、時には助言したりもする。あの度胸と弁舌を1割でも分けてほしいものだといつも思うが、その分こちらでは、口ばかりであり頼りにならないのも多いようである。それでもその中に本当にできる光る学生がけっこう何人もいて、彼らは自分のオリジナリティーを持ってエネルギーに仕事をしている。

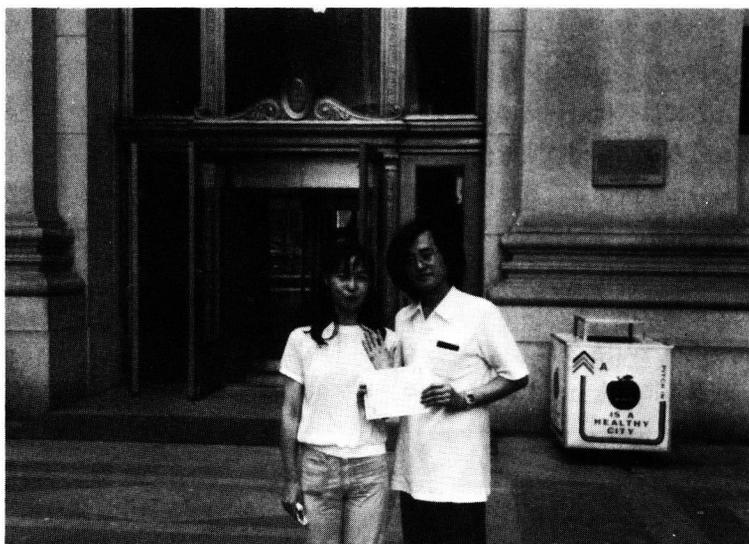
こうした全体の雰囲気、教授の人選、ゼミのシステム等、今日のコロンビア大学化学科は、有機化学者として、また教育者として名高いG. Stork教授の目と人柄によるところが大きいと言われる。

ここで少し私事を書かせていただく、私は1984年6月に渡米、その前年からコロンビアの中西香爾教授のもとでポストドクをしていた今の主人と結婚、同じ中西研で視物質蛋白関係の仕事始めた。

ニューヨークに着いて最初の問題は、保険のこともあっていかに早く結婚手続きをするかということだったが、こちらでは結婚するためにはマリッジライセンス（結婚資格）なるものが必要で、そのためには血液検査

にパスしたという医師の証明が必要である。まず2人で血液検査を受け（1人15ドル）、数日後に証明を受けとってシティーホール（市役所）へ結婚ライセンスを取りに行った（これが10ドル）。ライセンス取得後24時間以降一定期間（1カ月か2カ月）以内に結婚しなくてはいけない。それから結婚を司ってくれる人を探したが、キリスト教徒でない我々にとってはこれがそう容易でない。世話好きの中西研の秘書嬢が国連の教会初め方々電話してくれたが、夏の初めで休暇中の牧師さんも多く、なかなか見つからない。結局、費用5ドル、宗教関係なしというシティーホールで済ませることにした。立会人が1人必要とのことで、主人と同じ頃サントリー生有研から中西研にきて、主人ととても仲のよかったT氏夫妻がつき合っ下さった。

ニューヨークのシティーホールは、マンハッタンのダウントウンにある大きなビルで、ここの薄暗い2階の奥に「チャペル」と看板のかかった小さな部屋がある。ここで書類に名前を書き、木の長イスに座って待つこと30分。名前を呼ばれてT氏夫妻と共に隣の部屋に入ると、小さな祭壇の向こうに結婚を司る州のお役人が立っている。その前に並んで立つと、その人が古い英語らしい全然わからない言葉をひとしきりしゃべり、主人の方



結婚手続き終了後ニューヨークシティーホールの前にて

を見た。主人が思わず「What？」と聞くと、彼は「You should say yes.」と言う。主人が「Yes.」と言うと、お役人は次にまた何かしゃべってから私にも何か尋ねているらしいので「Yes.」と返事をする。「指輪を交換するように」と言う。指輪を交換し終わると「キスするように」と言い、それが終わると彼はさっさと壇をおりて、次の組を呼びに部屋を出て行ってしまった。これが全部で約3分。横に立っていたT氏夫人が、途中でフラッシュをつけて写真を1枚撮って下さったが、次のフラッシュが充電できる前に全部終わってしまった。何に「Yes」と誓ったのか今もよくわからないが、それでも出口でめでたく「結婚証明」の紙をもらい、せっかく来たついでだからと、T氏夫妻と一緒にシティーホールの近くのチャイナタウン、リトルイタリーを新婚旅行がわりにしばらくぶらぶらして、大学に戻った。直前にあわてて買いに行ったホワイトゴールドの結婚指輪は、確かに3分間役立ったが、仕事の都合上、以後2人とも1度もはめたことがない。

嫁入り道具は包丁が1本。「アメリカの包丁はとにかく切れない」と言われて、“5年間保証付”の牛刃を1本スーツケースに入れてきた。翌年日本から遊びに来た友人に砥石を頼み、最近は、大きな魚をさばくのに出刃包丁が1本と刺身包丁もほしいなど思っているところである。

私たちは、翌1985年3月までに中西研で仕事をしていたが、主人が中西研にお世話になって2年たったのを機に、そろそろ他のテーマで仕事をしたということ、その4月からニューヨーク州立大学に移った。キャンパスはマンハッタンから東へ100マイル、ロングアイランドという大きな島の中央にある。1日に数本の路線バスがあったが、車がなくては仕事も日常生活も全く思い通りにならない所で、運転免許のなかった我々はすぐ筆記試験を受けて仮免を取り、中古車を買って練習を始めた。実地試験の予約は混んでいて、夏になってやっと試験が受けられたが、最も難しいと言われるニューヨーク州でさえ、日本に比べれば驚くほど簡単で、こんなに簡単に免許を発行して

いいのかと思うほどだった。

これでようやく生活の足を確保し、いつでもどこでも自由に行けるようになったが、早稲田、コロンビア、と見てきた目には、大学のレベルの差は如何ともし難く、学生、設備、ゼミや仕事上のディスカッションの内容等、どれをとっても今1つ物足りない。移って5カ月足らずの8月末から主人が再び方々へ求職の手紙を書き始め、6通の手紙に対して、1カ月の内に3通の「OK」、3通の「NO」の返事が届いた。その中から結局、主人は、前々から1度その下で仕事をしてみたいと言っていたコロンビアのG. Stork教授の所に決め、私の方は再び中西先生にお願いして仕事をさせていただくことになった。

ニューヨーク州立大学での1年は、アメリカの平均レベルの大学の一例を見ることができた点で、この先ポストドク稼業を終えてもう少し継続的な仕事を考えるにあたり、貴重な経験になったと2人で話し合っている。

こうして、コロンビアを離れてちょうど1年後の今年3月末、私たちは再びコロンビアに戻り、低くなった給料と高くなった物価と税金に悩まされつつも、何か故郷に帰ったような気楽さで、マンハッタンのアップタウンを歩きまわっている。

今後のアメリカ滞在期間は未定。日本にはたくさん懐かしい人、懐かしいものがあり、未練はいっぱいだが、今しばらくはまだこちらをうろうろしているのではないかと思う。

ニューヨークにおいでの際は是非御連絡下さい。
(岡部正美 & 清水伸子, Tel. 212-222-7538)

(こちらでは書類や仕事の都合上、旧姓のまゝです)

(1986年5月)